

部 長 野 田 幹 広
研究主任 松 浦 崇 博 (小学校)
研究副主任 平 松 賢 人 (中学校)
部 員 数 47名

『小学校』

1 研究主題

ともに学び合い、高め合う児童生徒の育成を図る体育学習
～小学校 体づくり運動について～

2 はじめに

令和元年度に実施されたスポーツ庁による「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果では、小中学生の体力の低下が指摘されている。その背景として、学校での授業以外の運動時間の減少、スクリーンタイム（1日あたりのテレビ、スマートフォン、ゲーム機等の視聴時間）の増加などが挙げられている。

こうした児童の体力の低下を、本研究会でもこれまでの研究で同様に感じていた。例えばマット運動において、逆さになる、回転する際の体の動かし方が分からなかったり、何度も繰り返して練習してもできなかったりし、技の成功が困難な事例があった。このような事例から、体力の低い児童は運動に対して「できない」「分からない」と感じる事が多く、運動嫌いとなり易い。それに伴い、運動意欲・運動機会・運動時間が減り、ますます体力が低下するという悪循環に陥ると考えた。

そこで本研究会では、新学習指導要領で改訂された中から、「体づくり運動」の「体を動かす楽しさや心地よさを味わい運動好きになる」という点に注目し、研究することとした。本年度は、3年間の研究をまとめ、尾張教育研究会愛日支部（北部）学校体育部において紙面上で発表した。

3 研究の経過

昨年度までに、研究の仮説に迫るため、手立てをもとに各部員の勤務校において事前アンケート・授業実践・事後アンケートを行っていた。

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため本研究会による全体会は開催せず、昨年度行ったアンケート結果を小委員で集約した。その後、授業実践とアンケート結果の相互の関連の分析を行った。そして発表の原稿を作成・検討し、10月には紙面上で発表した。

4 研究の概要

(1) 研究の仮説

体づくり運動では、グループ（3～4人）でかかわり合う活動を行うことで、児童が体を動かす楽しさや心地よさをより味わい、運動好きになることができる。

(2) 研究の手立て

<手立て1> 運動における人数の工夫

- ・ 個人やペアで行うような体づくり運動も、グループでかかわり合って行わせる。
- ・ 運動が得意な児童と苦手な児童が混在するグループにすることで、お互いに声をかけられるようにする。

<手立て2> 発展的な内容に挑戦

- ・ 1時間の構成に、発展的な内容（仲間とより力を合わせて挑戦せざるをえない運動）を設定する。

(3) 研究の実際（昨年度実施）

ア 実施校と対象児童

市内の小学校11校に在籍する2～6年生児童662名（抽出）を対象とした。

イ 方法

① 事前アンケート

② 授業実践

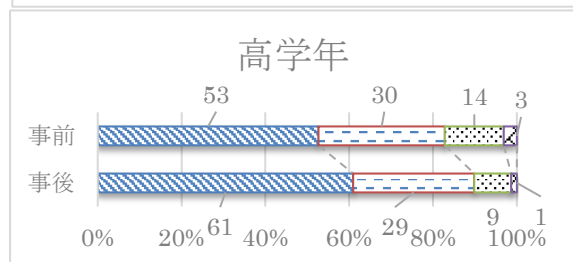
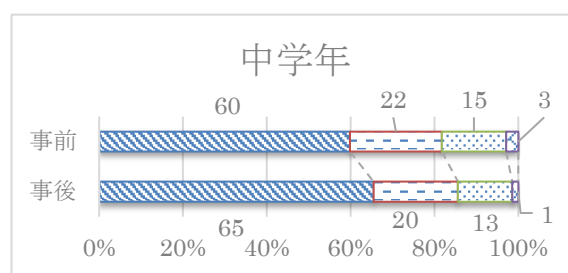
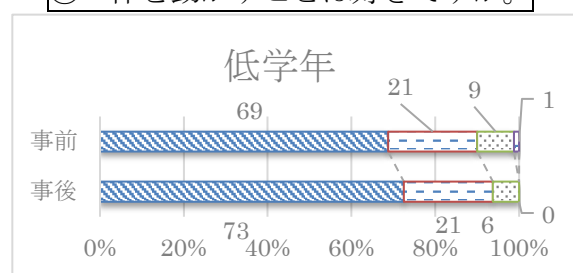
- ・ 4時間完了の単元計画を立てた。
- ・ グループ活動を中心とした。
- ・ (3) に示す学習内容を行った。
- ・ 学習カードを書かせ、その日に学習した中で考えたことや思考過程を振り返らせた。

③ 事後アンケート

5 研究の結果

「事前アンケート」と「事後アンケート」を比較し、今回の実践の成果を検討した。また、「低学年（1・2年）」「中学年（3・4年）」「高学年（5・6年）」の3つの学年区分に分けてアンケート結果を集計し、学年区分間での違いについても調べた。

① 体を動かすことは好きですか。



好き
 どちらかと言えば好き
 あまり好きではない
 嫌い

事前アンケートから、もともと体を動かすことに対して好意的に捉えている児童が多いことが分かった。今回の実践では、どの学年区分においても「好き」、「どちらかと言えば好き」と答える児童がわずかに増加する結果となった。

学年区分別に見ると、最も変化が大きかったのは高学年だった。事前アンケートで「あまり好きではない」、「きらい」と答えた児童が、事後アンケートでは7%減少している。これらの児童が、事後アンケートでどの項目を選んだかについても調べてみた。

あまり好きではない

48人

好き

どちらかと言えば好き

あまり好きではない

きらい

事後なし

3

22

20

2

1

きらい

9人

好き

どちらかと言えば好き

あまり好きではない

きらい

事後なし

0

2

4

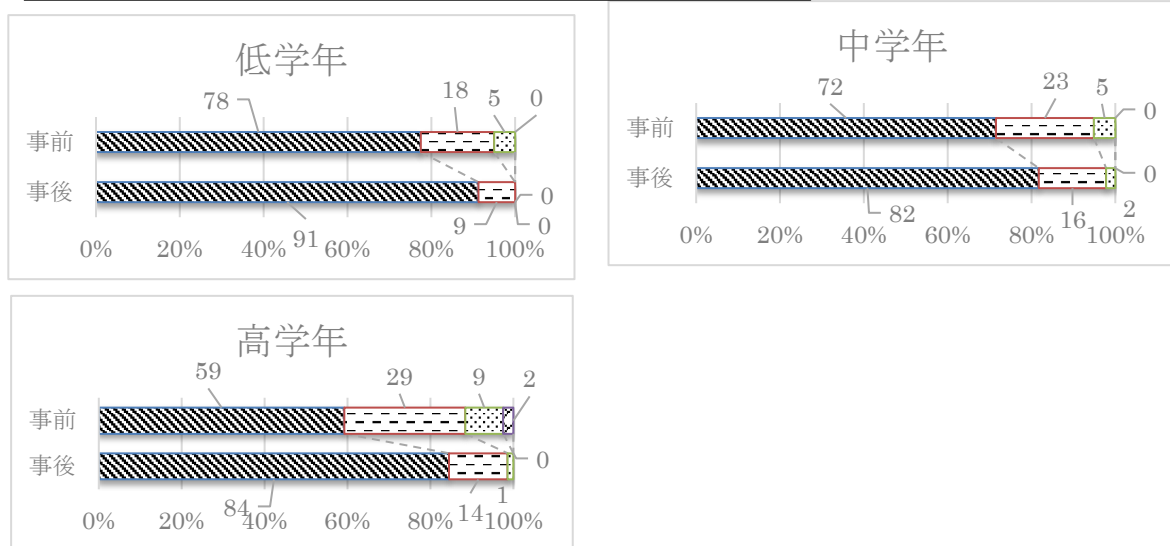
3

57人

27人

このアンケート結果から、体を動かすことがあまり好きではなかった高学年児童57人の内、半数近く（27人）が体を動かすことに対して好意的なとらえ方に変化したことが分かった。

- ② （事前）体育の授業は楽しいですか。
（事後）今回の体育の授業は楽しかったですか。



楽しい
 どちらかと言えば楽しい
 あまり楽しくない
 楽しくない

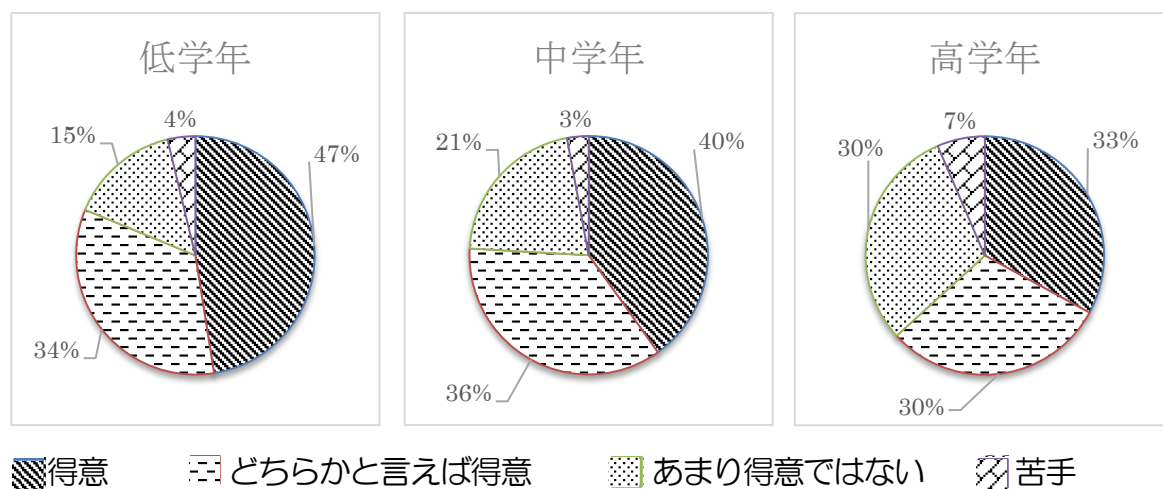
事前アンケートから、アンケート項目①の結果と同様に、体育の授業が楽しいと感じている児童が多いことが分かった。さらに、今回の体づくり運動の実践に対しては、全ての学年区分において、「楽しい」と答えた児童の数値が、事前アンケートに比べて10%以上

高くなる結果となった。

特に、高学年では、「楽しい」と答えた児童の数値が 25%も高くなり、アンケート項目①と同様、高学年の数値変化が最も大きかった。その理由の一つとして、事前アンケートの結果を見ると、「楽しい」と答えた児童は 59%にとどまっており、低学年 78%、中学年 72%に比べて低い数値となっている。この事前アンケートの差が、事後アンケートの変化量の大きさに影響したと思われる。

高学年で「体育の授業が楽しい」と感じている児童が、他学年に比べて少なかった理由について、事前アンケートでの「体を動かすことは得意ですか」という項目の結果が関連しているのではないかと考えた。

体を動かすことは得意ですか

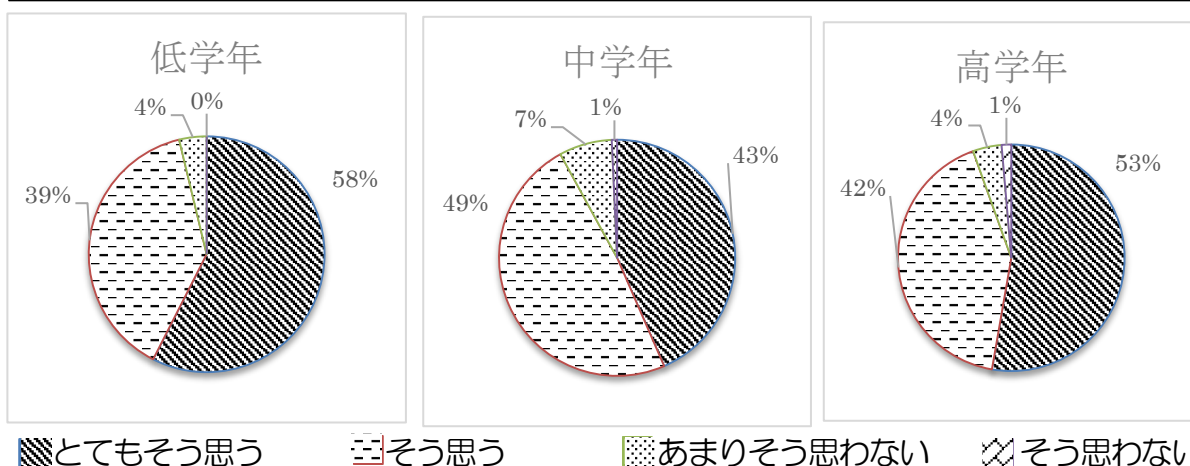


このアンケート結果からは、学年が上がるにつれて、運動を得意だと感じる児童が減少し、苦手だと感じる児童が増加していく傾向にあることが分かる。これに関連する内容として、「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」(スポーツ庁)において、体力総合評価 AB 群と DE 群を比較すると、運動が楽しいと感じる児童が DE 群において少ないという結果が出ている。さらに、DE 群の回答率を小学生と中学生とで比較すると、その割合は小学生よりも中学生のほうが低かったという結果が出ている。これは、本研究会のアンケート結果とも一致している。つまり運動の得意・不得意という要素が、運動の楽しさに影響を与えており、学年が上がるにつれてその傾向が大きくなると考えられる。

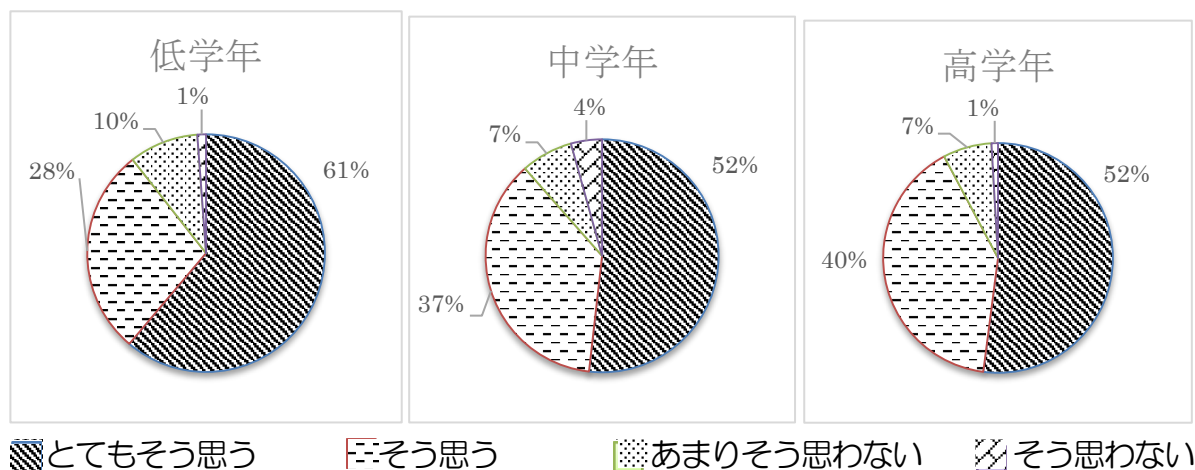
しかし、そういった児童にとっても今回の実践は楽しめるものであり、体を動かす楽しさを十分に味わうことができる運動であったことがアンケートの結果から明らかとなった。

今回は、体づくり運動をグループで行ったため、このグループでの活動が、授業の楽しさをより高め、児童のアンケート結果に影響を与えた可能性がある。それを調査したのが以下の③、④、⑤のアンケートである。これらの項目は、事後アンケートで調査した。このアンケート結果から、今回の実践でのグループでのかかわり合いの成果と、児童がどのように感じたのかを検証する。

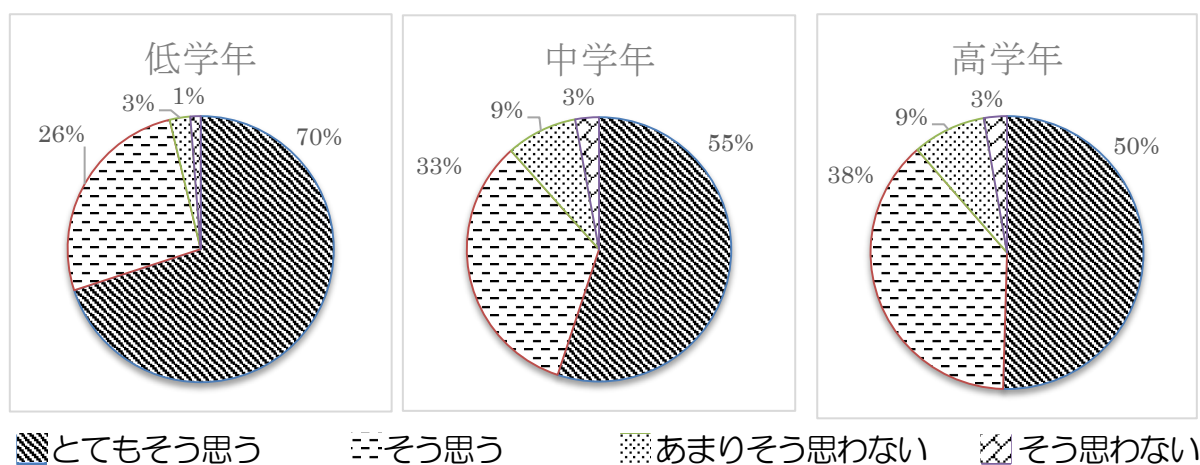
③ 今回の体育の授業をグループで行ったことで、今までより体を動かす楽しさが増えたと思いますか。



④ 今回の体育の授業をグループで行ったことで、今までより心地よく運動することができましたか。



⑤ 体育の授業をグループで行ったことで、今までより運動が好きになりましたか。



3つのアンケート項目に対して「とてもそう思う」と答えた児童の割合に着目すると、全ての項目において、3つの学年区分の中で低学年が一番高い数値となった。特にアンケート

ート項目⑤では「とてもそう思う」が中・高学年に比べ 15%以上高い数値となっている。グループでかかわり合う活動を通して低学年の児童に「運動が好き」と感じさせられたことは、グループ活動の成果の一つであるといえる。

また、アンケート項目③④からは、中・高学年でも約 90%の児童がグループでかかわり合う活動を通して、楽しさや心地よさが増えたと実感している。

今回の実践では、振り返りやアンケート結果から、グループで協力し合うことで友達と一緒に運動する楽しさを感じられた児童が多かったことが分かった。つまり、グループでのかかわり合い活動が児童に良い影響を与え、運動の楽しさや心地よさをより感じさせることにつながったといえる。

また、アンケート項目①と②で述べた高学年の数値変化についても、他学年に比べグループでのかかわり合い活動によって生じる効果が高かったために、他学年よりも大きな変化となった可能性が考えられる。

6 成果と今後の課題

今回の研究では、体づくり運動をグループで活動することで、児童が体を動かす楽しさや心地よさをより味わい運動好きになることができるということを検証することができた。

2 つの手立てを軸に実践を行い、＜手立て 1＞の運動における人数の工夫がグループ内での声かけやアドバイスを生み、その結果楽しく課題に取り組んだり、心地よさを感じたりできたのだと考えられる。また、＜手立て 2＞の発展的な内容を用意しグループの仲間と取り組ませたことで、力を合わせて挑戦する過程を楽しみながら達成する楽しさを実感できたのではないかと考えられる。こういった活動を低学年から継続して取り組んでいくことが、体育の授業を通して運動好きな児童を育てることにつながると考えられる。

事前アンケートで、「得意なことがない」や「体を動かすことが苦手だから」という理由で、運動が「好きではない」や「楽しくない」と答えた児童の半数以上が、今回の体づくり運動をグループで行ったことで、今までより運動に対して好意的なとらえ方に変化した。このことから、他の運動の領域でもグループ活動が児童に良い影響を与えるのか、またどのようにグループを生かして取り入れていくべきなのかを、今後の課題として研究を進めていきたい。

『中学校』

1 研究主題

ともに学び合い、高め合う児童生徒の育成を図る体育学習
～各運動での「運動の楽しさ」について～

2 はじめに

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、中学校部会においては小委員会を含むすべての研究会を実施しなかった。そのため、昨年度に引き続き、運動の中心なおもしろさに触れながら、生徒が思考を深めながらできる体育授業を、各部員の勤務校において実践・研究した。

3 研究経過

研究テーマに沿って、各部員の勤務校において実践・研究を進めた。

4 研究の概要

研究テーマに沿って、各部員の勤務校において実践・研究を進めた。

5 今後の課題

生徒の運動する機会が減り、授業ではケガや体調不良を訴える生徒の割合が増加傾向にある。コロナ禍での体育授業は、従来通りの計画では実施できず、試行錯誤を重ねながら進めてきた。学習評価についても、来年度より三観点での評価となるなど、体育授業における課題は山積している。

今年度、生徒に1人1台ずつのタブレットPCが整備され、体育授業でもICTを活用した授業が行えるようになる。ICT機器の活用方法も踏まえながら、引き続き各種目での「運動の中心のおもしろさ」の仮説・検証を進めていきたい。また、運動をより効果的にする器具の整備を進め、生徒の学びが深まる体育授業づくり、新学習指導要領での具体的な評価方法について模索していきたい。